

新たなチャレンジ楽しみに

人生変えた 絵との出会い

猿島郡三和町生まれ、現在は羽刈地区に住む。

「みのゝれはボランティア活動が盛んで素晴らしいところだと思えます。みのゝれに関わる人たちはみんなで成し遂げる達成感を味わい、イキイキしています」。

みのゝれプロジェクトチームの一つ『ときめき隊』は、自由に活動できることが魅力だという。「自分たちで考えて組み立てて実行していく。それが、みのゝれにたくさん人が集まってくる理由の一つではないでしょうか。『ときめき隊』は、みのゝれの館内通路を常に作品で満たして画廊のように演出し、いつ訪れでも美術に触れて楽しめる



市文化協会美野里支部の支部長を務める古谷さん。「三つの力を融合して何ができるか模索していきたい」と語る。

ときめき隊(ときめき美の小径 企画委員)

古谷 行雄 さん

みのゝれと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ

No.21

立春が過ぎ、柔らかな日差しに春の足音がもうそこまで来ているような感じがするこの頃：みのゝれでは「花」をテーマに華やかな展示物が飾られている。館内はまさに百花繚乱。この花を咲かせたのは『ときめき美の小径』を企画する「ときめき隊」の皆さん。そのときめき美の小径企画委員であり、他にもみのゝれ芸術展実行委員や市文化協会美野里支部長を務め、多くの団体に活躍する古谷行雄さん取材する。

るよう次々と企画を実践している。「市外の方にも気軽に立ち寄ってみよう」の素晴らしさを見てほしい」と古谷さん。これから、ときめき美の小径の案内板も『ときめき隊』が手作りで作ろうと計画中。どんなものが出来るか今から楽しみだ。

古谷さんは、四〇歳の時に町自主講座で水墨画と水彩画を習い始め一八年。子どもの頃はあまり絵を描くのが得意ではなかったが、手先が器用だったという。絵を描くようになったら、会社以外の人たちと知り合いになり、

写生会に出かける楽しみも見つけ、物の見方が変わってきたという。絵によつて人生観が変わった。絵を描くことは産みの苦しみもあるが、「題」を探するのはとても楽しい

という。県展に二回入選し、昨年は国民文化祭にも出展した。「チャレンジすることが楽しみのひとつ」と古谷さんは話す。

次に出版する日本画はさくらに決めているという。大子町に素晴らしいさくらがあり、現地を訪れるのを今から楽しみにしている。美術館めぐりも楽しみの一つ。「本物を見て目を養う」ことを大切にしている。

また、「何事も長く継続すること、毎回入選しなくてもいい：そんな楽な気持ちを持つことも大切」と付け加えた。

早朝に起き筆を握る。爽やかな空気を吸って、古谷さんの一日が始まる。

(藤田佐知子)